

長谷部史彦編著

## 『地中海世界の旅人』

——移動と記述の中近世史——

慶應義塾大学出版会 二〇一四・三刊

A5 三二八頁 三五〇〇円

本書は慶應義塾大学言語文化研究所の公募研究「前近代の地中海世界における旅をめぐる知的営為と記述」の成果として刊行された論文集であり、中近世の地中海およびその周辺地域を専門とする十二人の研究者が論考を寄稿している。本書において扱われる「地中海世界」とは、イスラーム圏とヨーロッパ圏を合わせた広大な多元的世界を指しており、そこにあつてなんらかの形で「越境」を試みた旅人やその記述に関する考察が最も主要な論題となつている。個々の論文の内容を紹介するだけの紙数が得られないため、以下、やや大味なカテゴリ分けのもとで紹介してゆこう。

関哲行「中近世イベリア半島における宗教的マイノリティの移動——ユダヤ人とコンベルソ、マラーノを中心に」、佐藤健太郎「一七世紀モリスコの旅行記——ハジャリーのイスラーム再確認の旅」、藤井真生「イタリヤ司教の目に映つた一五世紀のチェコ——エネアのボヘミア・レポートとその背景」、守川知子「地中海を旅した二人の改宗者——イラン人カトリック信徒とアルメニア人シニア派ムスリム」は、それぞれ自らの生まれ育つた場所とは異なる宗教的アイデンティティを持つ地へと旅した人々の足跡や書き残したものから、彼らに

とつての異境と彼ら自身のあり方を描き出している。

岩波敦子「学知の旅、写本の旅——中世地中海世界における科学知の継受と伝播」、太田啓子「中世のメッカ巡礼と医療——クスター・イブン・ルーカーの巡礼医学書の記述から」、栗山保之「インド洋船旅の風——ポルトガル来航期におけるアラブの航海技術研究の一齣」は、学問的知識が、時には宗教の別を越えて、旅をするかのごとく継承されていったことを明らかにする。

神崎忠昭『ローマの都の驚異』考——「ガイドブック」あるいは政治的文書、森本一夫「ナーセル・ホスロウとその『旅行記』——屋上に牛はいたのか」、長谷部史彦「イブン・バットウータの旅行記におけるナイル・デルタ情報の虚実」は、旅に関する書物が、当時の政治的状況や書き手の状況が埋め込まれた結果成立しているということを見取し、その史料の読みに警鐘を鳴らす。

藤木健二「近世オスマン帝国の旅と旅人——エヴリヤ・チェレビーを中心に」、櫻井康人「一四世紀—一六世紀前半の聖地巡礼記に見る「聖墳墓の騎士」——儀礼へのフランチェスコ会の関与過程を中心に」は、旅行記の中の記述をもとに、旅の中の具体的な要素を掘り下げつつ、旅が行われた環境までを含めて考察を行う重要性を指摘する。

以上に見てきたように、本書は中近世の地中海世界の旅という場において浮かび上がる宗派やマイノリティの問題、旅と学知の関係、旅行記史料をいかに読み、利用するべきか、ということについて、様々な角度から示してくれる。またそれ以上に、中近世の旅と旅行記の具体的な諸相を知ることのできる一冊となつて

いることは間違いない。

(亀谷学)